

富永神社祭礼奉納

と き 平成九年十月十日(金)
 午後四時三十分始
 ところ 富永神社 能楽殿

能組

仕舞 老松 葛城 養老 佐野 仁美 平野 阿裕美 島野 考三郎

狂言 福の神 藤野 なつか

参詣人 柳 早裕美
 参詣人 伊藤 麻依
 後見 畑中 良雄

仕舞 阿羽衣 阿漕 今泉 孝子 佐野 菊代 鳥居 久仁子

仕舞 敦行 柳盛 本田 洋子 岩崎 葉子

狂言 樋の酒 大郎冠者 福井 基真

次郎冠者 城所 収二
 主 高柳 翔太
 後見 畑中 良雄

仕舞 老松 猩猩 下山 敬子 村木 岳史 中嶋 薰 清水 俊典 八島 母々

離子 猩猩 大鼓 清水 俊典 大鼓 中嶋 慎 小鼓 永田 六兵衛 笛 今泉 仁美

狂言 雷 雷 権田 重紘 華師 天野 雅夫 後見 佐野 元之助

連管 中之舞 加藤 貢 太田 研司 今泉 英三 酒井 淑規

連調 羽衣 高林 白牛 口二 小鼓 鈴木 芳子 高林 伸二 川村 直子

6:30分頃 (休憩 三〇分)

5:50分頃

5:20分頃

5:05分頃

4:50分頃

4:30分頃

7:00分頃

狂言

墨

塗

大名酒井

宏

太郎冠者 加藤賢一
女 安形忠久
後見 佐野元之助

7:25分頃

能

六

浦

シテ 森田 收

ワキ 竹内省吾

間 畑中良雄

大鼓 河村 総一郎
小鼓 福井 啓次郎

大鼓 鈴木 崇史
笛 竹市 学

後見 鈴木 肇

地謡

竹内三郎 太田康弘
田中洋二郎 高林白牛口二
中嶋康夫 高林 呻二

8:30分頃

狂言

止動方角

太郎冠者 水谷至男
主 大原正巳

伯父 小林常男
馬 中山伸一
後見 佐藤友彦

仕舞

笹之段

鈴木 肇

9:10分頃

半能

融

シテ 今泉英三

ワキ 竹内三郎

後見 鈴木 肇

大鼓 河村 総一郎
小鼓 永田 六兵衛

大鼓 中嶋 康夫
笛 竹市 学

地謡

鈴木 崇史 太田康弘
田中洋二郎 高林白牛口二
竹内省吾 高林 呻二

附 祝言

(終了予定 九時四十分頃)

主催本町区

あ ら す じ

狂言 福ふくの神かみ

年の暮れに出雲の大社へ連れ立って参詣に出かけた二人が、福の神の神前で豆をまき、囃していると、笑い声とともに福の神が姿を表します。
自分から御酒を上げるよう催促するほどの気さくな福の神は、二人に楽しくなるよう教えを説き、目出度く舞って去って行きます。

狂言 樋ひの酒さけ

主人は、留守中に二人が酒を盗み飲みをするので、太郎冠者は米蔵を次郎冠者は酒蔵を出ないようにと言いつけて外出する。次郎冠者の酒を飲むのを羨んだ酒好きの太郎冠者は、酒蔵から樋を架けて窓ごしに酒を飲ませてもらい、その上酒蔵に入って二人で謡い、舞い、賑やかな酒盛りを始めるが……

狂言 雷かみなり

都に住むやぶ医者、商売がうまくいかないので東国へやって来る。折からのわか雨で雷鳴がとどろき、雲間から雷が落ちる。雷は落ちた拍子に腰を打つたらしく苦しむので、治療をたのまれた医者は、鍼を打つことにします。ところが雷は痛がって騒ぐが……

狂言 墨すみ塗ぬり

帰郷することになった大名、都で馴染んだ女に別れを告げると悲しんで泣きます。
女が水入れの水で目をぬらし、泣いたふりをして見つけた太郎冠者は、水を墨に取り替えます。
女の顔が真っ黒になったので、大名も女の本心を知り……

能 六む浦つら

都の僧が東国行脚の途中、相模国六浦の称名寺に立ち寄る。山々の紅葉も今が盛りとみえる中に、一本の楓だけが紅葉してないので不審に思っていると一人の女が現われ、そのわけを語って聞かせる。昔鎌倉の中納言為相がこの寺に紅葉を見に来たとき、山々はまだなのにこの楓だけが紅葉していたので、一首の歌を詠じた。するとこの楓の木は喜んで、このように面目をほどこした上は身を退くのが天の道と考え、それ以来常磐木のようになったのだと、女は告げて秋草の中に消え失せる。(中入)
その夜、僧がこの寺で読経していると、楓の精が女体となって現われ草木国土悉皆成仏の仏徳と讃えて神楽を舞い夜明けとともに消える。

狂言 止動方角しどうほうかく

茶くらべに行きたい主人は、馬と太刀と茶壺がないので、太郎冠者に命じて伯父のところへ借りに行かせます。伯父から馬に変な癖があり、うしろで咳せきをするので暴れるので気をつけるよう注意を受けます。その時の馬を鎮めるための呪文も教えてもらいます。主人は帰りが遅いと叱りつけ、馬に乗って先へ行くこうとします。腹を立てた太郎冠者は、咳をわざととして主人を落馬させてしまいます。怒った主人が……

半能

とおる
融しわぶき

東国から上京して来た僧（ワキ）が六條河原院を見物している。仲秋の名月である。そこへ一人の老翁（前シテ）が田子を荷って現われる。老翁は旅僧に尋ねられて、河原院こそ融の大臣が陸奥の塩釜の景を称したところであると述べる。さらに老翁は融の大臣は難波の御津の浜から毎日汐を汲んで運ばせ、塩を焼かせたりして楽しんでいられたのだが、大臣が世を去られた後は誰もあとを継ぐ人がなく、ここは荒れはててしまっていると語り続ける。老翁は旅僧に、あたりの名所を教えたあと田子を荷って渚に出て汐を汲むが、そのうちに、老翁の姿は見えなくなってしまう。（中入）で清水寺門前の者が旅僧の求めに応じて融の大臣のことなどを語ったのち、大臣への供養をすすめる。旅僧が寝ていると融の大臣が貴公子の姿で現われ、忘れがたい河原院で名月の下、早舞を舞う、そして夜の明けるころ、月の都へと去っていく。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。